すべては夜にはじまっている

稀々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すべては夜にはじまっている

【Ｎコード】
Ｎ７５４１Ｘ

【作者名】
稀々

【あらすじ】
二人は夜に出会っていた、らしい。
一夜明けて記憶が曖昧な彼女と、しっかり覚えてる男性のお話。

（前書き）

初めての投稿です。
どきどきです。
よろしくお願いします！

ぼんやり覚醒をはじめて、閉じたままの瞼の奥に朝の光を感じる。
手には心地いいシーツの感触。
すっと鼻から空気を吸えば、どこからか石鹸のいい香りもしてくる。
そして後ろからの誰かの呼吸の耳に入ってくる。それもすごく近くから。
腰の辺りには何か重みを感じる気もする。
いや腰ががちがちに固定されてるような。

集まった情報に脳が警報を鳴らす。大警告。
反射的にぱっと目が開く。
し、しらない。
どこだここは？

目が泳いじゃうよ。
飛び起きたい、気分。
でもそうなのだ、気分だけなのだ。
というか足は必死にバタバタしてますとも。
だけど、さっきから腰ががちがちに固定されてて動けない。
びくともしない。
あーどうしよ、どうしよ。
どうにかしようと頭はフル回転なんだけど、解決策が見つからない。
理解不能な状況にさらには手もバタバタし始めちゃう始末。
もう自分でも収拾できない。
考え過ぎて知恵熱でそう。

そうこうしてたらだいぶもぞもぞ動いたのがよかったのか、
さっきまで無反応だった背後にも動きが。

それに対して反射的に自分は静止。

初めてのことだらけで、異常事態過ぎて深く考えてなかったけど、いや考えたくなかったのかもしれないけど、背後には確実に人がいる。

しかも、腰を固定してるもの――おそらく腕――のちから強さからして男性。

背中にびんびん感じている気配の大きさから予想すると、結構身長あり。

こんなことを考えてたら腰にまわされている腕がもう一度腰を抱えなおした。

さっきじたばたしたことで少し生まれた、二人の間のスペースがまた縮まる。

むしろ前より近い気もする…ってそれは困る！

腹をくくるしかない！

「あ、あの…」

「なに？」

弱々しい声しかだせない自分にはがっかりだけど、返事が返ってきた！

ちょっとかすれた甘い雰囲気のある声とその声の近さにびっくりする。

「あの、えと、どこからきけばいいのか…今何時ですか？」

「朝の８時ごろ」

「ここは？」

「俺の部屋」

「あなたは？」

「りょーすけ」

「で？」

「で？あー、…」

こんな風に疑問をひとつずつりょーすけさんにぶつけてった。
りょーすけさんは眠いのか、説明が面倒なのか返事が短い。
一問一答形式に近かったから、結構時間がかかった。
だけどりょーすけさんはひとつ残らず答えてくれた。
そしてその間中耳元に響く甘い声は、胸をどきどきさせていた。

昨日の夜に私たちは出会ったらしい。
昨日の夜といえば友人の誘いでバーにいった。
そのバーの開店何周年かを祝うものだどかで、広い店内には人が溢れていた。
つまりはパーティーだった。
一緒に行った友人は素敵な人を見つけたとどこかへ行ってしまって、
そのあとは一人カウンターで飲んでいたはずだけど、記憶がない。
その記憶喪失の部分が、りょーすけさんの答えをつなぎ合わせることで分かってきた。

一人で飲んでいた私にりょーすけさんが声をかけたこと。
その時すでに私は出来上がっていたこと。
二人の意気がとてもあっていたこと。
その結果、私がりょーすけさんとこのまま別れたくないと駄々をこねたこと。

どれも記憶から消してしまいたい行動ばかりで、
血の気がっさーっと引いてくのが分かる。
そのせいで自分に回された彼の腕は、ひどく温かく感じられる。
二人一緒にひとつのベッドに寝ているこの状況。
これはつまり一線を越えてしまったんだろうか？

一番聞きたくて聞けなかったけど、やっぱりはっきりさせないと。
「あの、二人一緒に寝てるということは…あの」
「寝てない」
質問の先を読んで返された返事にすごくほっとした。
最後の最後では、ちゃんと踏ん張っていたらしい。
「ほんとですよね？」
「ほんと」
あーよかったー。
ちょっとほっとした。

でも現状は変わらない。
どうしよう。

「起きる？」
その声と一緒に腰に感じていた重みはなくなって、
りょーすけさんが背後で身体を起こしたのが分かった。

首をひねってりょーすけさんを見上げれば、とてもきれいな目と目があってしまった。
一気に顔に熱が集中するのを感じる。
か、かっこいい！
そう思った瞬間俯いてしまう。
声だけでも十分どきどきさせられたけど、さらにこの顔！
さっき以上に胸がどきどきしすぎて、相手に聞こえちゃうんじゃないかとさえ思う。
胸に手を当てて自分を落ち着かせようと努力していると目の前が陰る。
ん？と少し顔を上げた。

ちゅ

閉じられた瞼、
長いまつげ、
温かい唇。
……唇が温かい？！
頭の中がパニックのうちに、もう一度ちゅっと音を立てて唇が離れた。
見開いた目できれいな双眸を見つめ、無言で答えを求める。
さっきから空気を読める彼は、すぐ返事をくれる。

「かわいかったから」
やっぱり短い。けどまた顔に熱が集まってしまうには十分な一言。
さらに彼は言葉を続ける。
今日一番長い。
「昨日まゆは俺を気にいってくれた。
俺もまゆを気にいった。
だから、付き合おう」
そう言いながら微笑む彼を見ていたら、
自然と出てきた言葉はひとつ。

「はい」

（後書き）

いかがでしたでしょうか？
終わり方が唐突！と思ったのですが、
とりあえずここでひと区切りにしておきたいと思います。
少しでも楽しんでいただけたなら幸いです。

初めて完成させたので嬉しい反面、
まだまだ力不足ということも身にしみました。
もっと力をつけて続編、りょーすけサイドからなど書けたらいいなと思います。

ここまで読んでいただきありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7541x/

すべては夜にはじまっている

2011年10月20日04時15分発行